資料紹介

# 姉崎正治留学時代の井上哲次郎宛書簡

高橋　原

以下で翻刻紹介するのは，東京大学史史料室所蔵の井上哲次郎旧蔵書簡の中から新たに発見された井上哲次郎宛の姉崎正治自筆書簡である[1]。姉崎自筆の書簡は現存するものが少なく，特に明治期のものは希少である[2]。発信地はロンドンで，1902（明治35）年５月８日の消印がある。当時28才の姉崎は，文部省の命により留学中であり，身分は東京帝国大学文科大学助教授であった。帰国は1903年で，その後1905年に宗教学講座が設置され，初代教授となったのはいうまでもない。

ロンドン時代の姉崎の生活ぶりについては，隣人土井晩翠との交流など，『新版　わが生涯』にも記されている[3]。この時期の思索の跡は，『太陽』誌上に公開された高山樗牛宛書簡に見ることができるが，そのうち，「再び樗牛に与ふる書」（『太陽』8-10，1902年）は，ニーチェ，ショーペンハウエルとの関係においてヴァーグナーを論じたものとして特に有名である。ここに紹介する書簡は，「再び樗牛に与ふる書」直前にあたる時期に書かれたものであり，ヴァーグナー論の着想が記されている。心霊研究（Psychical Research）への言及は，帰国後に開講した「神秘主義」においてオカルティズムまでも論じたとされる姉崎が，実際に心霊研究のサークルに出入りしていたことを裏付けるものである[4]。この他，仏典研究の進捗状況[5]や観劇の感想などをいちいち書き綴っており，人名をサンスクリットに読み替えて冗談を飛ばすくだりなど，指導教授であり岳父でもあった井上哲次郎との意外にも親密な関係があらわれているかにみえる[6]。しかし，さらに読み進めると，近況報告はただの前置きに過ぎず，インドへの旅費やカメラ購入についての文部省との折衝など，きわめて実際的な用件が本題であることがわかる。

この書簡によると，インドへの渡航時期が直前まで未定であったことがわかるが，留学命令書に「宗教学研究ノ為メ満三年間独逸国留学を命ス　但帰朝ノ途次印度へ立寄ヲ要ス[7]」とあるとおり，姉崎のインド行き自体は当初から決まっていた。姉崎は渡航を翌1903年として留学期間を延長したいと書いているが，実際には文部省の都合どおりそれを断念した。実際にロンドンを離れたのは1902年10月であった。これが留学期間の短縮を意味すると姉崎は書いているが，これは，インド滞在を勘定に入れず，1900年３月に日本を出てからロンドンを発つまでの二年半を留学期間とすると，当初の満三年の予定から半年ほど短くなるという計算によっている。姉崎はパリ，イタリアを経て，12月にインドに着き，ベナレスで樗牛の訃報に接し，1903年６月に帰国することになった。

凡例

一，本書簡は二つ折りにした便箋（縦221mm×横162mm）二枚の裏表を合計８頁として，万年筆によって書かれている。

一，封筒表の消印からは「HOLLOWAY.N MY8 02」，封筒裏の消印からは「TOKIO 12 JUNE 02」の文字が読み取れる。

一，封筒表書きは，「Prof. Inouyé Tokyô, Japan 小石川表町 井上哲次郎様」となっている。

一，表記は常用漢字に統一した。

一，原文に句読点，改段冒頭の一字下げはないが，読みやすさを考えて，翻刻者が適宜加えた。

卅五年五月七日

日本にてをれば端午もすみたる此頃エルダーの花は咲きそめ南欧より桜やいちごの果の来るにも係らず北欧一対に空風吹き今日も此地は時々霰まじりの雨ふり室内にても暖爐の辺を離るる能はざる位に候。此地に着きてより殆ど一ヶ月に候へども未だ自分の寓は入らず他人の室に居り候為十分に落ち着かず時々博物館に行き又は芝居音楽会に行く外家にありては手当たり次第にワグネルとショペンハウエルとを読むのみに候。ショペンハウエルの意志の形而上学と意志否定の解脱道徳説とは相両立すべきや。何故に又如何にしてニーチエはショ氏の形而上学より出でて個人絶待の道徳超絶説に転じたりや。又ワグネルはショ氏の書を見る前には殆ど彼の哲学者と同じ考えにありしに其書を見其見る所を同じうするを喜び自分の意見が此に依りて光明を得たりと喜びし後却て転じて意志否定の道徳を愛の没道徳観に化し愛の全能を鼓吹し又之を戯曲にするに至りし此間の消息如何。此等を仏教并に一般に印度宗教の発達に対照する事如何にも興味深き問題と思ひ時々の翻読にも此見方にて読み居り候。此問題は恐くは形而上学と道徳と宗教と美術との根底に入り得る関門と存じ候。其結果が何時得らるるや，自分にも因より期せられず候。

四阿含と五部ニカーヤとの関係については此地に居る間，リスデギヅ氏[8]にも相談し，尚進で研究したく今迄の処にては雑阿含のSagâthaにつきて殆ど三分の二比較并に同文比照終り特に別訳の順序は麗蔵のは紛乱の結果にて明蔵の順序とパーリのとが大に相同じきを見即ち二者同源に関係する一の証左を得候。又中阿含は三分の一ばかり同定し候。此と同時に仏陀論と相対すべき人生論にも多少材料を集め，沙門四果と菩薩十地との関係につきて求め候へども思はしき解釈を得ず。

来月十三日には即位式に参列すべき印度諸王の招待会をR.A.S.[9]が開き候。会費も多く，衣服の新調をも要し大に閉口に候へども此には可成出席したき者と思ひ候。

Psychical Researchの会には此頃Chrystal gazing[10]の実験のみにて面白き事少く候。

芝居はアーギィング[11]がファウストのメフヰストを演じ居候。其他は見せ物然たる者或はコメデーのみに候。ドデー[12]のサフォを芝居に致し候へども如何にや。見る気も致さず。ミュンヘンのカペルマイステルにてワインガルトネル[13]といふワグネル派の人，エンヒロスのオレステースを短くして楽劇にせし者ライプにて始めて興行し面白く見候ひしが，此人又King Learといふシンフォニーを作り先日此地にて自ら指揮し候を聞き候。ワグネルの継承者といふ程には至らざるもワグネル派の命脈は先づ此人に存する事なれば，其の作が此二新曲の如く心理的に深刻に赴くは喜ぶべき事と思ひ候。二者共に随分の喝采を博し候。特にオレステースが母を殺して出で来たりての苦悶の場の音楽と此場を閉づるコーラスがモイラを呼ぶ歌とはキングレ

アの狂気して逃るる場の音楽と共に非常なる心理的激動を表しワグネルがワルキューレの初幕トリスタンの二幕に表したる恋愛の激情の声楽と相映じて非常に面白く感じ候。此等の音楽日本にては聞く事を得ずと思へば心細く候。

Andrew LangはMaking of Religionの二版と新刊のMagic & Rel. とにて大に宗教の起原に関する従来の諸説を転覆せんと試み候[14]。近々面会可致候。日本の国立常尊の如きも氏の説の一材料となるべく候。

ロンドンに着して後二週間は宿屋に居り候ひしが，今は土井[15]の旅行中其室に寄生致候。明後九日より其隣の家に移り候。家族は商人にて寡婦と三人の男子とにて皆商店に通勤致し候。夜は集りて奏楽致し皆々ワグネル好きに候。今居る家の名はBrahamにて家はマルセイユより来れる十才の男子あり。名をRaoulといひ候。梵天の家に羅云[16]とは面白き配合に候ひずや。其家に林吉Vanaçrîと正治Samyak-saṁkalpa[17]と居るも宿縁といふべきか。

数日前文部省に印度旅行の願を出し候。今年秋印度に向て出発するとすれば留学短縮となり来年秋出発とすれば延期になり候へども夏は印度に行く事出来ず九月中旬出発の為には二者何れかを執らざるべからず依て此二様の願書を出し候。可成は延期を希望致候へども此が為印度旅行の金を減ぜられざる様に致し度く印度は汽車は廉価に候へども宿泊や案内にて金を多く要し候故，文部省の人に此事能く御伝え被下度候。旅費総額は旅行八ヶ月にて規定の旅費二千五百円ばかりに候。此よりも大に減ぜらるる様にては本の素通りも六かしかるべく印度旅行の目的を達する為には旅費十分ならざるを得ず。ロンドンにてすら学資の乏欠を満たす為借金居り候に此上印度旅行に自分の空嚢を苦むる事大に苦痛に候。此辺篤と御話し被下度候。又右印度旅行中，図書，図画，偶像，置物等，採集仕り度，文科大学の経費の許す限り御依託相成り度く候。文部省の都合にて留学延期を致さず，即本年九月中旬或は下旬に出発する事と相成候へば右金子十月上旬に到着する様ボンベイ領事館に御送り被下度，又留学を延期印度へは来年九月に出発する事となり候へば此経費は来年度からの分となるべきにつき御見込みに従りて特別に御請求相成難きや今より御相談被下度候。右採集の費用が幾何を要するやは小生も因より今より見込を立て難く只多ければ其れ丈け多く採集し得文科大学の宗教博物館の基早く出来候訳に候。

右採集の外に時々必要に応じて写真撮影の必要可有之。只今の小生の財政にては到底右器械（熱帯地方にては軽便器械役に立たず，立派なる者を要し多分百五十円以上と存じ候）を求むる能はず。将来に日本国内の研究旅行にも必要有之候へば文科大学備品として経費御支出出来まじきや。写真器械は歴史の方にも美学の方にも必要と存じ候。一基位は文科に備へられたく候。

ロンドンに来りては富の力の大なるに驚くと日本の貧乏に驚くとの情に堪へず。ブリチンミユゼアムの十分の一の設備と探究費とにてもあらばと思ひ候。然し日本の皇室が学術に金を出す様になるは黄河の澄むと同時と存知候。

即位式[18]の準備何や彼ややかましく候。行列見物の席料が２£以上海軍閲兵の見物旅費が８£以上故吾々は此の世俗のさはぎには遠く居る外無之候。

ロンドンにて　正治

井上先生

机下

## 註

(1)『東京大学史史料室ニュース』第39号（2007年11月30日）において，同史料室の谷本宗生室員が古書店より井上哲次郎旧蔵書簡60点を入手したとの報があり，閲覧に出向いたところ，この書簡が含まれていた。その他，井上自身のドイツ留学期間に受取ったと見られる書簡類も数点含まれ，宗教学にゆかりのある人物のものとしては，Eduard von Hartmann発1897年11月18日付書簡，今岡信一良発1942（昭和16）年1月11日付書簡も含まれている。

(2) おそらく最初期のものは，立正大学日蓮教学研究所所蔵の姉崎正治履歴証関係資料中の，母そでに宛てた，明治26年9月11日付の手紙である。その他の書簡については，『近代日本における知識人と宗教—姉崎正治の軌跡』(磯前順一・深澤英隆編，東京堂出版，2002年）所収の目録参照。

(3) 姉崎正治先生生誕百年記念会，一九七四年，89頁以下。

(4) 姉崎は，これに先立つ1月8日ベルリンにハルトマンを訪ねた際に「スピリチスム」への接近を戒められたと記している（姉崎嘲風編『樗牛文篇　文は人なり』博文館，1911年，429頁）。

(5) "THE BUDDHIST ÂGAMAS IN CHINESE", TASJ, 35-3, 1907等に結実する。

(6) 姉崎の妻マス（増子）は井上の姪であるが，いったん井上の養女となってから姉崎に嫁いだとされる。

(7) 明治三十二年十月十三日付。立正大学日蓮教学研究所所蔵。

(8) Thomas William Rhys Davids (1843-1922)。英国の仏教学者。

(9) The Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland（王立アジア協会，1823年設立）の略。

(10) 綴りは原文ママ（=Crystal gazing）。

(11) 英国の俳優，Sir Henry Irving (1838-1905)か。

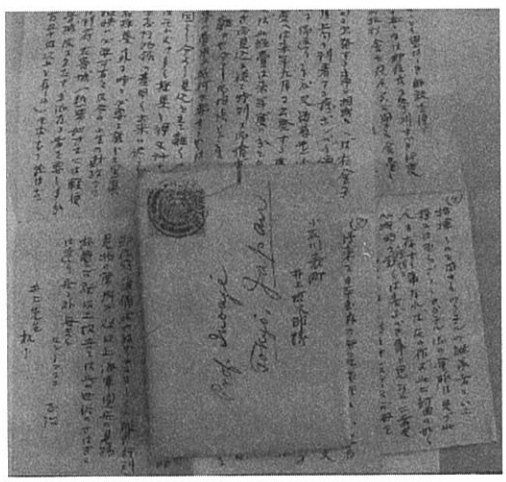
(12) Alphonse Daudet (1840-1897)。フランスの作家。『サッフォー』は1884年の作品。

(13) Felix Weingartner (1863-1942)。オーストリア生れの指揮者。

(14) Andrew Lang, *The Making of Religion*, London: Longmans, 1898; Andrew Lang, *Magic and Religion*, London: Longmans Green, 1901.

(15) 土井晩翠。すぐ後で言及される林吉は晩翠の本名。

(16) 羅云（らうん）は釈迦の実子で十大弟子の一人。羅候羅（ラーフラの音写）とも。

(17) いずれも林吉，正治の漢字の字意をサンスクリットに直訳したもの。Samyak-saṁkalpaは八正道の一つ「正思」。

(18) 国王エドワード七世の戴冠式。これについては，姉崎「戴冠式延期と英国民の覚醒（樗牛に与ふる第三書）」（『太陽』8-11，1902年）を参照。